別紙様式第６（第５条第１項関係）

論　文　要　旨

博士課程 甲・㊁	第53号	氏　名	三好　良英

[論文題名]

Weight control in schizophrenic patients through Sakata's Charting of Daily Weight Pattern and its associations with temperament and character（グラフ化体重日記を用いた統合失調症患者の体重管理と気質性格特性との関連）Asian Journal of Psychiatry 7: 52-57, 2014. DOI: 10.1016/j.ajp.2013.10.018

Burnout in Japanese residents and its associations with temperament and character（日本人研修医のバーンアウトと気質性格特性との関連）Asian Journal of Psychiatry 24: 5-9, 2016. DOI:10.1016/j.ajp.2016.08.009

[要　旨]

気分障害やストレス関連障害等，精神疾患の発症や経過への気質性格特性の関連は従来から指摘されているが，近年 Temperament and Character Inventory（TCI）を用いた報告も多い。今回，統合失調症患者の体重管理と研修医のバーンアウト発症の気質性格特性との関連について，TCI により検討を行った。

まず，統合失調症患者を対象に，グラフ化体重日記を用いた認知行動療法的アプローチが食行動に関する認知を改善し体重の維持または減少をもたらすのか，また統合失調症患者における体重変化に特定の気質性格特性が関与しているのか検討を行った。研究協力者の 50 名を 2 群に分け，25 名の介入群は毎日のグラフ化体重日記の記録を 16 週間継続するよう指示し，月 1 回の体重測定と体重管理についての面接を行った。25 名の非介入群は月 1 回の体重測定のみ行った。食行動に関する認知の改善について食行動質問表で評価し，気質性格特性について TCI で評価した。16 週間後の Body Mass Index（BMI）を 0 週と比較したところ，介入群では 0.59 ± 0.10（平均±標準誤差；以下同）kg/m^2 減少した。非介入群では BMI が 0.66 ± 0.18 kg/m^2 増加した。食行動質問表では，介入群では合計得点の減少に有意傾向がみられたが，非介入群では有意な変化はみられなかった。体重の増減と気質性格特性の相関分析では，介入群では体重増加と尺度得点の間に相関を認めなかったが，非介入群では自己志向性と体重増加の間に弱い負の相関が有意傾向にあった。この結果から，統合失調症患者の体重管理において認知行動療法的アプローチが有効である可能性が示唆された。

次に，研修医のバーンアウト発症に特定の気質性格特性が関与しているのか検討を行った。2012 年と 2013 年に宮崎大学医学部附属病院卒後臨床研修センターで研修を開始した 1 年目研修医 85 名を対象とした。研修開始時に TCI を，研修開始時，研修開始 4 ヶ月後，10 ヶ月後にバーンアウトを評価するために Maslach Burnout Inventory-General Survey（MBI-GS）を，抑うつを評価するために Self-rating Depression Scale（SDS）を施行した。研修開始後 10 ヶ月間で，全体の 23.5%が新たにバーンアウトを，全体の 15.3%が新たに抑うつを経験していた。バーンアウトと判断された群では協調性が有意に高かった。抑うつと判断された群では損害回避が高く，自己志向性が低く，自己超越性が高くなる傾向が認められた。この結果から，TCI によるバーンアウト発症の予測の可能性が示唆された。

備考　　論文要旨は１，０００字程度にまとめるものとすること。